

【資料紹介】

『孝連人物考 和合編』 —美濃国における河瀬友山とその「孝連」活動—

ファンステーンパール ニールス
(京都大学)

本稿では、河瀬友山著『孝連人物考 和合編』(1837年序)という詩歌集とその出版状況を紹介・分析し、全冊翻刻することを通じて、以下の三点を図る。第一に、資料調査で新たに発見した、本書の異版の内容を公表することで、近世美濃国研究の基礎情報を提供する。第二に、友山が美濃在住中に運営していた「孝連」という組織の実態を明らかにする。第三に、『孝連人物考 和合編』増加版の出版意図を検討する。仮説として、その増加版とは、友山が水火天神の神職に就任することが決まってから、美濃在住中における活動の集大成として自分の「孝名」を後世に残そうとしたものであったと論じる。

はじめに

近世後期に活動した社会教育者の中に、河瀬友山(1791 - 1857)という人物がいた。美濃国大野郡寺内村の河瀬東三郎の長男として生まれ、天保十二年(1841)正月に、錦小路頼易の猶子として迎えられた後、同年三月、京都の水火天神こと水火天満宮の神職に就任した、という履歴を持つ友山は、「孝」道徳を軸に、講釈と出版活動に勤しんだ¹。現存する版本の量から考えて、当時はその名はある程度知られていたはずだが、現在、友山を体系的に検討する先行研究はなく、彼への言及も常に短い紹介で終わっている。

さらに、その僅かな先行研究においては、一つの誤解が繰り返されている。それは友山の活動の全てが水火天神を拠点にしたということである²。確かに、彼の著作の大半は水火天神の神職に就任してから発行されたが、それ以前にも、友山は美濃在住中に講釈・出版活動を開始し、水火天神と関係ないところで、社会教育者として成功を収めていた。

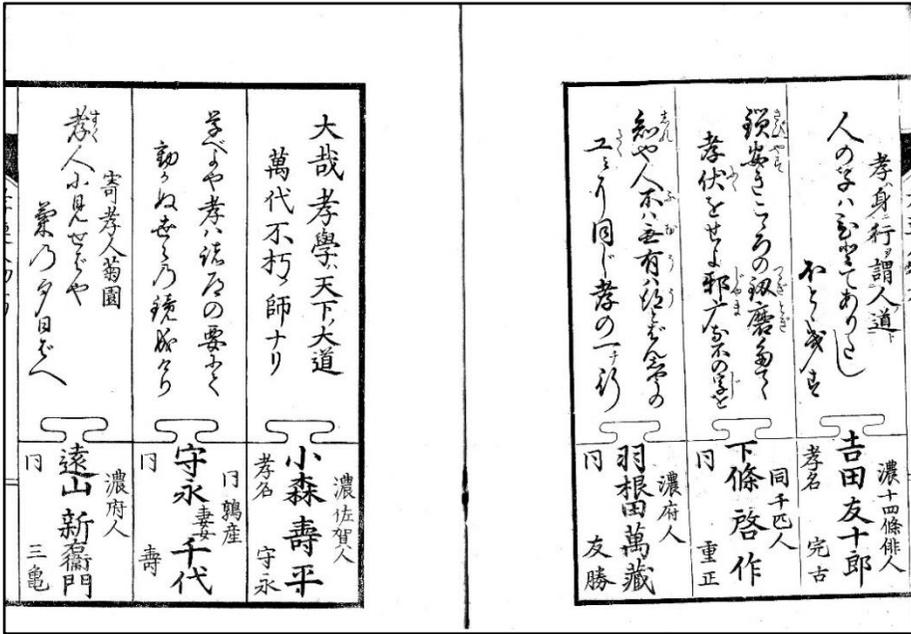
本稿は、『孝連人物考 和合編』(天保八、1837年序。後『孝連人物考』と略す)の分析を通して、友山が水火天神に就任する前の活動を明らかにする。

1. 『孝連人物考』の紹介 — 二つの問題提起

『孝連人物考』というのは、河瀬友山が編纂した、おおむね美濃国出身の詠み手による詩歌集である。詩歌集は近世を通して多種多様に編纂されていたが、『孝連人物考』には特徴がある。

というのは、題名に「孝連」が冠していること、読み手の氏名や住居と合わせて、その「孝名」が記されていること、詩歌は全て何らかの形で「孝」徳目に触れていること（【図I】）³、という全書に一貫した「孝」への強い執着がある。

図I 『孝連人物考』の詩歌



これは何を背景に、何を意図して生まれた作品であるのか、先行研究からの手ごかりはない。編者友山に関する研究が皆無であると同時に、本書も顧みられることがなかったのである。複製版ましてや翻刻もない。あるのは、『孝連人物考』を「美濃国の孝連百二十人を録せり」や⁴、「美濃国の孝行なるもの一二〇を記している」⁵、「百二十人の孝名の上に道歌や狂歌を載せた」ものとする短い紹介文のみである⁶。しかし、実は、以下で詳述するように、『孝連人物考』の内容はそれほど安易なものではない。

① 孝連の意味

「孝連」という語は何を意味するのか。先行研究にそれを「孝行なるもの」と解釈したものがあるが、これは誤解である。確かに、本書の【序I】(序と跋については第3節を参考)にも、親孝行は「諸道の要、善行の根元」として唱えられ、また「一人の孝子有時ハ、其一国自ら豊なり」というように、「孝」という道徳と、「孝子」という存在への敬意を示しているが、詩歌の読み手が「孝行なるもの」である根拠はない。

筆者は、「孝連」は「講の連中」を意味する「講連」のもじりであると考え。その根拠は、

内容と形態ともにある。第一に、詳細は後述（第2節3項）するが、【跋Ⅱ】に書かれている内容は、まさに「講」という仕組みと一致しているものである。第二に、河瀬友山の著作の一つの特徴として、「孝」を同音の字と入れ替えてもじることがある⁷。たとえば、【序Ⅰ】に現れる「孝明」「余孝」「孝感」「孝名」は、それぞれ「光明」「余光」「好感」「高名」をもじっていると考えられる。また、「入孝」「孝釈」「孝席」のように、「講」をもじる語が多いため、「孝連」もまた「講連」のもじりであると考えられるのである。

② 異版の存在

『孝連人物考』に掲載されている読み手の数について、先行研究はそれを120人と述べるが、これは補足を要する。というのは、詠み手を120人しか収めていない版本は確かに存在するとはいへ、筆者が今回、所蔵先が知られている全ての版本を調査した結果（【表Ⅰ】）、156人所収の異版も存在していることが明らかになった。

表Ⅰ 『孝連人物考』版本一覧

	所蔵先	請求番号	詩歌数	序Ⅰ	序Ⅱ	跋Ⅰ	跋Ⅱ
A	私		120	有	有	有	有
B	水火天満宮		120	有	有	有	有
C	水火天満宮		120	有	有	有	有
D	大阪市立大学	(森) 281/KAW	156	有	有	有	無
E	岐阜県図書館	281-192	156	有	有	有	無

表Ⅰのとおり、【A、B、C】と【D、E】という二系統の版本があり、その内容は、所収詩歌数と、【跋Ⅱ】の有無という二点において異なっている。その他の異同は一つもなく、同じ板木が使われたと考える。

この二系統の出版順について、【D、E】系統が後版、すなわち増加版であるとする根拠は二つある。第一に、異同の詩歌分（36首）は、本書にばらばら挿入されているのではなく、6版本に6首ごとにまとめられた形で掲載されていること。新たな読み手の登場により、その詩歌が新たな版本で同時に追加されたことは容易に想像できるが、逆に削除する必要が生じたという事情は考えにくい。第二、【A、B、C】になく【D、E】にある詩歌分が、本書本文の冒頭と末尾、すなわち詩歌格付けとしての高い位置に配置されていること。わざわざ新しく追加された詩歌であるとするならば、それをやはり高位に位置づけたという理解が自然である。

以上、『孝連人物考』の内容を紹介したなかで、二つの課題が浮上してきた。第一に、「孝連」がすなわち「講連」であったならば、その組織の実態とはいかなるものであったのか。第二に、『孝連人物考』の増加版は、どの時点、何のために出されたのか。本稿は、この二つの問いを順に検討する。

2. 『孝連人物考』の分析 — 「孝連」という組織の正体

① 孝連の発端

孝連の発端は、【序Ⅰ】によれば、養老の瀧の伝説と関わる。周知のとおり、この伝説の設定は奈良時代の美濃国であり、酒好きな老父を養いたい息子の親孝行の志が天に通じ、瀧の水が酒になり変わった話である。『孝連人物考』によると、この息子は土師友人という人物であり、天皇は、感動のあまりに彼を美濃守に任じた上、年号を養老に改めた。つまり、717年のことである。それをきっかけに、友人は孝積道を始め、「国々を巡廻し、孝連を建て、孝道を進め」という⁸。友山が属する河瀬家はその子孫にあたる⁹。

以上の由緒を鵜呑みすることはもちろん危うい。というのも、いわゆる「養老伝説」自体が、歴史的に変容したものであるからである。もとより、初出と思われる『続日本紀』（巻七、元正天皇）では、孝子も酒も登場せず、養老の瀧は単に「美泉」で、その水に老病を治す効果があるとされた。孝子と酒という要素が伝説に加わったのは、中国の孝思想の影響のもとで、鎌倉中期に編纂された『十訓抄』と『古今著聞集』においてであった。この伝説の変容は、近世においても意識され、『大日本史』でも指摘されている¹⁰。しかし、近世の庶民が「養老伝説」について知ったのは、『続日本紀』『大日本史』経由よりも、『十訓抄』と『古今著聞集』や、それを踏まえる『本朝孝子伝』を通してであったと考えられるため、孝連の由緒もさほど違和感なく受け入れられたであろう。

② 孝連の活動

孝連の活動について触れるものとして、『孝連人物考』の【跋Ⅱ】がある。孝連に属するには、二日または三日ごとに（つまり、2日、5日、7日、10日、12日、云々）一銭の「掛銭」を払うことが条件であった。

その納金が使われた用途は、次の三つが挙げられる。第一に、代参経費である。孝連が企画したのは、二月の「放生会」（詳細不明）と、八月の「京都孝官聖廟」（詳細不明）への代参であった。くじ引きによって各目的地に講員二人が選ばれ、路用銭を持たせた上で行かせた。第二に、祈祷経費である。【跋Ⅰ】にあるように、河瀬友山は願主として、孝連の講員に代わって、毎日、「孝明神の孝宮」を祭るため祈祷と供え物を行った。第三に、施印経費である。施印とは、無料配布印刷物のことであり、代参の際などに人々に配られた。【跋Ⅱ】に言及される「孝の御札」と「孝養ケ条」との施印に関しては、前者は現物が確認できていないが、その複製と思われるものは『孝連人物考』の巻末に刷られている（【図Ⅱ】）¹¹。後者は二種類が流布されていたようである（【図Ⅲ】【図Ⅳ】）¹²。

図Ⅱ 「孝の御札」



③ 孝連の詩歌

『孝連人物考』を詩歌集として紹介したが、厳密に言えば、所収されているのは詩歌のみではなく、僅かながら作文もある。全156作品の内訳は、和歌(116首)、漢文の題に読んだ俳句(10首)、和文(12文)、原漢文(12文)、書き下し文体漢文(6文)である。形態の差とはいえ、その内容はなんらかの形で「孝」道徳を賛美している点において共通している。しかし、【序II】にあるように、『孝連人物考』は河瀬友山が唱えている「孝学に心を寄て言散したる言の葉」を集めたものなので、詩歌の対象は、「孝」自体よりも、「孝学」もしくは、それを通して理解されている「孝」である。「今までハ惰弱に保し、我身をも新に清む孝学の席」(57)や、「慕ひ行、道の言のは文わけて教にちかき孝学の席」(94)、「垢付し賤が心を汲わけて入孝連に身を清むらん」(62)、「孝連に入てうれしき意より天地の父母に身を任してハ」(75)などの和歌は、その「孝学」へのこだわりをはっきりと反映している¹³。

さらに言えば、「孝座参会の席へハ早集り、必ずしも人を待しむべからず」(102)のように、孝連の講約のようなものを述べているものもある。また、『孝連人物考』の作文は、先に触れた「孝養ケ条」施印に通じる箇所が多いことも目に着く。「生涯の孝徳を失する事、密夫奸通に不過。強而可畏ハ此一条なり」(55)が、「不義密通人の妻を犯すべからず」と似ており、「孝学を誹謗者ハ、天道神仏の冥罰を蒙る。不孝ハ目前天下の罪人なり」(56)は、「善行に進人を誹謗すべからず」と似ており、「孝の行に至らんとならば、先常に清浄の物を喰、神棚・仏壇を奇麗にして信心すべし」(68)は「清浄潔白の物を以て家内を養ふべし」と似ている。

以上、詩歌に現れる「孝学」へのこだわりと、「孝養ケ条」との重複を考えると、『孝連人物考』に作品を寄せた人は、題名のとおり、孝連に属し、友山の孝談を聞き、その出版物を読んだ人であったことは間違いないようである。

④ 孝連の構成

『孝連人物考』に掲載されている読み手を孝連の講員と考えて差し支えないことを確認したが、その講員の構成とはどのようなものであったのであろう。まず男女構成として、全159人中、女性は僅か9人であった¹⁴。その中で、7人は『孝連人物考』に所収されている男性の妻もしくは娘であり、2人だけがそういった関係性がなく、独立した形で記されている¹⁵。

同じく、地域構成も極めて偏っている。全156人中、美濃出身の者が149人と圧倒的に多く、他には、京都3人、伊勢2人、江戸1人、近江1人という割合である。美濃国内に限って言えば、表れている住居総数は68所であり、一見広い頒布に見えるが、内55所については、それぞれ一人か二人の出身者しかいない。残り13所が、総人数の過半である77人の出身地であることを考えると¹⁶、講員の地域頒布はわりと集中的であるといえる。

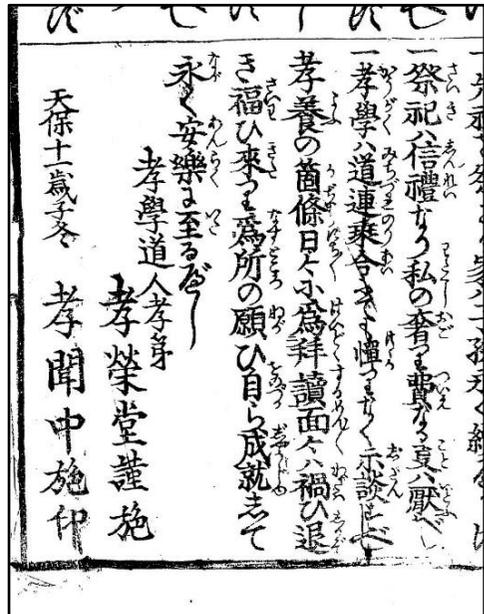
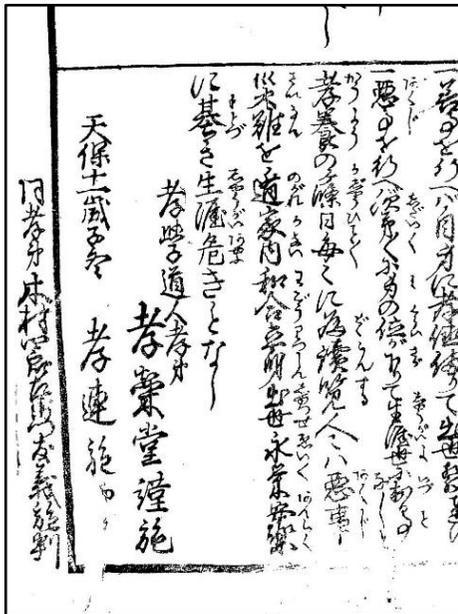
講員の社会的な立ち位置についての記述はないが、皆が和歌、場合によっては漢文・漢詩を嗜んでいる以上、ある程度の教養を身に着けた人たちだと推測できる。だが一方、河瀬友山が二年前に執筆し、美濃国の「芸能道術に秀達」した人物200人を収めた『三野人物考 和合編』(1835年序)と『孝連人物考』所収の人物との重複が僅か一人しかないという事実を考えると

に在住した時期に出されたことになる²⁰。友山が濃府から京都へ移した時期は不明だが、天保十二年三月、水火天神の神職に就任するので、その前であることは確かであろう。もちろん、情報が古くなった扉の版木をそのまま使い続けた可能性を否定できないが、友山が前著『三野人物考 和合編』の改版において示したマメな改刻から考えると、扉の情報は信頼すべきであろう。要は、『孝連人物考』増加版は天保十二年三月以前の刊行となる。

では、増加版を要するほど、天保八年と天保十二年との間の四年間に何があったのか。手がかりを提供するのは、先述した「孝養ケ条」である。この施印二種とも、「孝学道人謹施」とあり、友山を元の施主としているが、それを配布した組織として、前者天保七年版は「孝連」、後者天保九年版は「孝聞中」と記している。この「孝聞中」の詳細は不明だが、後の時代に出された施印から推すと、孝連の姉妹講のようなものであろう²¹。また、天保十一年に再版された「孝養ケ条」二種にもまた興味深い手がかりがある。今回の施主は、「孝学道人」本人ではなく、「孝学道人孝弟 孝栄堂謹施」となっている（【図V】【図VI】）。「孝弟」は「高弟」のもじりであると考えられ、つまり友山の弟子となる。

図V 「孝連ケ条」(a) 再版

図VI 「孝連ケ条」(b) 再版



友山は、天保八年と天保十二年との間に、姉妹講や、個別に出版活動している弟子を生むほど活躍していた。そうであるならば、孝連の講員もそれなりに増え、『孝連人物考』の増加版が求められることも当然であろう。しかし、講員が増加したとはいえ、彼らは一斉にはなく、徐々に入講したはずである。そのため、増加自体は増加版の刊行を決めた近因であったとは考

えにくい。そこで思い返してほしいのは、増加版の異同として、講員の追加のほかにも、【跋II】の削除もあったことである。この削除こそが増加版のきっかけであったと考えると、意外と説明がつく。

つまり、友山は天保十二年に水火天神に就くが、この就任は青天の霹靂のような出来事ではなく、それなりの根回しも必要で、前触れがあったはずである。ならば、美濃在住中の友山は、今後、京都に居住を移してから、自分が苦勞して築いてきた、拡大しつつある孝連をどう維持するかについて考えたはずである。活動を完全にやめるか、新たな形で展開させるのか、という選択肢はあったとはいえ、現時の形で活動を続けることは不可能となった。この選択が迫られた時、「孝名」を「後世に伝る」事の大切さを常に唱える友山も、自分の「孝名」を考慮し、存亡の危機に直面した孝連の、現時点の盛んな実態を後世に残そうと増加版に挑んだのではないか。その際、孝連の新たな講員を募集する必要もなくなったため、講約の役割を担った【跋II】を削除したのではないか。

先行研究は、河瀬友山の水火天神への就任をその活動の開始と捉えるが、以上の仮説が正しければ、それは当時本人にとってむしろ活動終了の可能性さえ帯びた出来事であったと考える。実際、友山の神職就任はその活動の開始でもなく、終了でもなく、転換期となったが、その詳細については別稿に譲ることとする。

3. 『孝連人物考』の翻刻

翻刻凡例

- 一、底本に岐阜県図書館所蔵の版本を使った。
- 一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に改めたが、誤字は直さなかった。
- 一、適宜、句読点や中黒（・）を施したが、濁点は加えなかった。原漢文の訓点は略した。
- 一、詩歌の左に振り仮名がある場合、それを〔 〕内につけた。
- 一、本文を翻刻の末尾に移動させ、「本文の作品」と「本文の作者」に分けた。
- 一、「序」と「跋」と「本文」という見出しと、本文作品番号と、本文作者の項目は筆者が参考の便のために設けたもので、原文にない。

【序I】

孝かう 菅くわん 相さう 丞じやう と 奉けい 敬し しハ、孝明の尊靈、我本朝え出現し 在ま して、六位の官くわん よりして、
 孝行の御徳をんとく 自を ら 顕あら れ、正敷一位の政官まさしき に昇進あ し、富貴榮花の御身せいくわん に備しやうしん り給ふうきぎくわ ひしかど、
 国土の人民こくど を憐じんみん み給あ ひ、勅免たま を蒙ちよくめん り、御身かうむ を筑紫み の土師つくし に遷はて り、方法うつ 和合ばんほう の孝道わがふ をひら
 け、天拝山てんはいざん におゐて誓ちかつ て託宣のたまはく 、我靈わがぬい を祭まつ り、入孝にうかう の人列じんれつ ハ余あます まじ、洩もらす まし。信心堅固しんじんけんこ
 の孝子かうし に育した て、即今そくこん より来世らいせ まで禍罰くわばつ 苦患くけん を遁のが らしめ、界内界外かいだい 、平等けい 和合びやうどう 永く泰平わがふなが 万穀たいへいはんこく

成就我孝明の内に産ずる物一として我孝精の念力に至らざる所有べからず。後世に我神霊の守護国民家毎に、信心盛なるに至らば、必ず疑念有べからず、トの御誓ひ実哉。わかひのもとまうすをよばすとうどちくりうそのかいこくいたきせんしよどうしやべついはずかうをんほうしや大日本ハ申に不及、唐土・竺・求、其外国に至るまで、貴賤諸道の差別を不言、為孝恩のためやごとゆいろじどうころくはんでんまんしさいてんじんぐうをのつそんしんたてまつ報謝、家毎ニ遺漏なく、児童の頃よりして孝菅天満自在天神宮ト自ら尊信し奉ることほんこくいつとうしよかくしよどうはんぶついたいちじるきれいけんよかうかうむらざいふこととうと事、万国一統書学書道万物に至るまで、著靈験の余孝を不蒙ト謂事なし。尊むべし。しんげばんこくいつたいわがふせいびやう信ずべし。実に万国一体和合の聖廟なり。

我孝釈の開祖三百余歳翁土師の友人ハ、孝行の徳に依て瀧の水泉酒ト変。其孝感天朝に達し、御幸有て孝感の余り、友人をして美濃守に任られ、猶孝官を勅免有て年号までよろろうぐはんねんあらためたまそのちよくかうありかたしやくどうひらいごゐくはんすちよくめん養老元年ト改賜ふ。其勅孝を有難ふして孝釈道を開て五位の上官に進ミ、勅免をかうふくにしゆんくハいれんたてどうすくわかふしやうれんめいつたたま蒙りて国々を巡廻し、孝連を建て、孝道を進め、和合正連の孝明を伝へ給ふ。故に今にいたり至て、たとへ無官たりとも、孝学道に入、孝席に進ミ、孝釈を施ス内ハ、五位の上官自ら備ると言伝へるハ此所以なり。

孝学講釈

孝ハ諸道の要、善行の根元たり。故に不聞事ハ孝学にならずト。可聞ハ孝釈、可行ハ孝道、可揚ハ孝名にて、親なき人は猶更に其孝名が専一なり。国に一人の孝子有る時ハ、其一国自ら豊なりと言。人も我も孝学孝釈の孝席に連り、聴聞孝感する時ハ、天道神仏の本願に叶ひ、悪事・災難を遁れ、無病延命・富貴繁昌、即今来世、栄花安楽に至るべしト、神託によつて濃府清水堂の主孝学道人謹誌

【序II】

縁なき衆生ハ導がたしと勤る功德の人々に縁を求め、孝学に心を寄て言散したる言の葉ハ、賢愚雅俗の趣向を不撰、有の俣に書集て一所ニ連、人物考と題して、後世に伝る事、先祖・子孫えの孝養にして、人々の名利・名聞にあらず。見に感じ、聞に移り、自善と連る孝門の橋掛りと寿留事志加里。

天保八歳丁酉初夏中日

清水堂
川瀬友山謹述

【跋I】

孝ハ万法の要、孝学ハ諸道を引立る万法、和合の大道なり。諸法の和合こそ、天地の父母
 え孝養に叶ひ、三光明に万物和合して、自泰平を致す者なり。況於国民乎。家内
 和合して災難消滅、富貴繁盛、身体和合すれば、無病延命・信心成就して、後世ハ安楽
 国土を極め、子孫永栄、人々の孝名を伝へ、天下泰平・万穀成就、為国家孝行、酉年の春
 より、清水堂の主孝学道人、孝学古例の孝連を建、入孝子の面々、天地神仏・先祖子孫へ為
 孝養、孝連人々名前一々孝明神の孝宮に奉勸納、常灯明を捧げ、日々に新にして、御
 膳を伝へ、御鏡餅、御菓子、孝製養老子等、奉備之。天下泰平 豊年豊作 孝連人々
 名前一々 災難消滅 職業繁昌 家内安全 無病延命 夫婦和合 信心成就 子孫
 永栄。孝養感通の御祈禱、日々毎に勤行、懈怠なく誓願の功德を積み、孝徳の御流に浴
 し、御治世の恩沢を蒙り、冥加を思ふ人々ハ、尠報志にも足ぬべき哉と進むる功德供々に
 入孝連の篤達平等に希而已。

【跋II】

孝の御札並孝養ケ条の略書施しに出し、八月放生会、二月京都孝官聖廟への代参ハ二
 人ヅ、孝連の内より落籤ニて相勤、路用钱ハ兩人え四貫文相渡なり。
 御掛銭ハ常灯明・御備物料・施紙料・放生会・御祈禱料、惣代兼而二日目三日目に一銭
 ズ、なり。掛る所ハ尠一文ヅ、二日目三日目なれ共、孝連の人々え備る所の感通の供物
 ハ日々永々無懈怠、御祈禱の勤行有之事、誠ニ少銭積りて大善となり。陰の祈りが陽
 の利生。孝連え入孝の人々ハ、生涯不飢不寒、身の危きを不知、即今・来世の苦患を遁れ、
 後代世々に生を得る共、願力・孝精の至らざる所なく、信心堅固の安楽に住する事、孝
 太無量の功德ハ後世子孫えも相継べし。
 家内のべり、和合の種、我と我身に備る孝徳銭ハ別掛に不成様、孝官の孝連に入し功德
 を思ひ、家内万事に心懸、儉約を専らにして無益の費の立ぬ様、常々心懸る時ハ其功德
 年内積りて孝大なり。其孝大の積り銭の内にて、二日目と三日目に一文ヅ、の御掛銭が半季
 積ても七十二文也。

濃府清水堂孝学道人願主友山

【本文 作品】

1. 孝者万物雖多其治一也
2. 前だけれが玉簾に乗も孝行の徳の積りし内ぞゆかしき

3. 孝行の 身を写し画の 形見をも 名をも伝へん 子々の榮へに
4. 孝者五常之本、教道莫先於孝
5. 孝の世へ 行に生し身ハ 功を立 名を後世へ 置土産せよ
6. 教民親愛、莫善於孝
7. よしあしハ 心にとひて 迷ひなく 庭のおしへの 道を行まし
8. 水の面に むかへうつる 我影を 親のかたミと 思ふかしこき
9. 孝行な 人ハ年徳 あきの方 四方八方 万よしなり
10. 孝学を 聞に北野の ほとゝぎす 一声なりと 家土産にせん
11. 忠ハ内 孝ハ外なり 中心に 思ふのか忠 行ハ孝
12. 夫といふ 文字を戴く かんざしハ 一本さすが 孝貞の道
13. 巡りめくる 道ハ孝そと 行ハん 身に余りぬる 親の恩かも
14. 堀出す 黄金の釜と 白雪の 中から竹の 孝行の徳
15. 孝の道 行ハ行なり 行ひの 行を常と 行るが行
16. 孝者諸行之源 涼しさハ さまなから 夏の月
17. 道おほき 道の内にも 孝の道 この道行ん 道枝折して
18. 孝の字を 頼む心の 一筋に 万の神も 守りたまハん
19. 昔明王以孝治天下、況於身家乎
20. 淳朴ハ至孝の本 親の 風にまかする 柳かな
21. 孝積を 花に寄添て 永き日や 聞たといわす 八重咄し
22. 身体不毀傷者孝之始也 雨に風に 身を守り初ん ことし竹
23. 不朽名の 年経ぬる程 世に薫る 孝文木 [ムメ] の 榮へ尊し
24. 天地親祖の余孝ヲ無非業 薫る恩の 風や尊し 身に幾世
25. 親々の 形見を己が 物にして 気促に孝を 行へや人
26. 神体を 尋て見れば 孝行の 心ぞ靈の 験なりけり
27. 親の威を 借て振出す 大鳥毛 奴等扱も 孝も有かい
28. 植置し 人の 齢も 色かへず 心ハ孝に 住よしの松
29. 強らねば 喰ぬ天屋の 孝の餅 進める人も 供々に喰へ
30. 孝立身ノ生陽ヨリ、界内界外、皆是孝ニ非スト云コト無シ
31. 家内にて 日ハ夫なり 月ハ妻 六ツまじいのが 孝明と知れ
32. 自化共に 孝心を 破ざる様 戯たる言の葉を 散すべからず
33. 月待や 日まち代待 孝信を 待人々に 靈験ぞある
34. 行徳有バ高位ノ孝前ニ不可恥 地に住ど 雲井も畏ず 揚ひばり

35. 覚さまさばや 目めを孝行と 明あけがらす鳥しとね 褌をもハ重うつき 親うつの移うつり香
36. 有あがたや 天地あめみつの父母つに 抱いだかれて 日々あつまの意見あつまを 明あつまくれに知あつまれ
37. 雨あめ満みつる 神あめも仏みつも 聖あめ人も 孝行あつまにこそ 身あつまを尽あつましけり
38. みの佐すむ賀むに 住すむよしあしも 旧ふる里さとの 親あつまへ孝あつまぞと 慕はまふあつま浜あつま荻あつま
39. 成ならば来こい 行をふ孝あつまの 強つよきにハ 不のの字あつまを脱あつまで 降かう参さんやせん
40. 孝者あつま至あつま徳あつま要あつま道あつま也、人あつま之行あつま無あつま大あつま於あつま孝
41. 諸あつまの 願あつまひを庚あつま 申あつまの夜あつまに 集あつまる人あつまの 孝心あつまをまつ
42. 無事あつまな顔あつま 見あつまつ見あつまられつあつまの 宿あつま下あつまり 奉あつま孝あつまばなし 家産あつまにせん
43. 神あつまハ心あつまナリ信あつま心あつまナリ 信あつまニ中心あつまノ 勤あつまヲ謂あつま忠あつま 心あつまノ信あつまヲ身あつまニ 行あつまヲ謂あつま孝
44. 妙法あつまハ 忠孝あつま二行あつまの 勤あつまにて 蓮花あつまハ心あつま 經あつまハ孝文あつまなり
45. 身心あつま勤行あつま、忠あつまハ 忠あつまニ而あつま陰あつまナリ、孝あつまハ行あつまヒニ而あつま陽あつまナリ
46. 不忠あつまナレバ親あつまの心あつま不安あつま。親あつまノ心安あつまズルヲ孝あつまノ行あつまヒトス。故あつまニ一あつまツ孝あつま立あつまテハ、忠其あつま 忠あつまニ在あつま。
47. 天地あつまの 親あつまへ報恩あつま わすれずバ 忠孝あつまもたち 子孫あつま栄久あつま
48. 南無あつまハ孝 阿弥陀あつまハ行あつまぞ 仏々あつまハ 信あつまの人の こゝろなりけり
49. 天あつま満あつま 宮坐あつまかしこき 孝学あつまの 伝あつまへハ代々あつまに 不あつま朽あつま梅あつまが香あつま
50. 己あつまが身あつまに かむる不あつまの字あつまを 卸あつま捨て 今日あつま行あつまひの 孝門あつまにいる
51. 孝ト知あつまらバ 我意あつまや不あつまの字あつまを 去あつまよかし 親あつまや夫あつまに 任あつます身あつまなれば
52. 神あつまの本体あつまハ心あつまなり 心あつまに有物あつまハ信あつまなり 信あつまの発あつまする所あつまハ身あつま也 身あつまに行あつまふハ孝也
53. 行徳あつまを あふげバ空あつまに 孝明あつまの 内あつまに羽あつまをのす 鶴あつまの一あつまト連あつま
54. 可愛あつまさの 余あつま重荷あつまハ 親あつまの恩あつま 小付あつまハ下あつませ 孝行あつまの旅あつま
55. 生涯あつまの孝徳あつまを失あつまする事あつま、密夫あつま奸通あつまに不あつま過あつま。強あつま而あつま可あつま畏あつまハ此あつま一あつま条あつまなり
56. 孝学あつまを誹謗あつま者あつまハ、天道あつま神仏あつまの眞あつま 罰あつまを蒙あつまる。不孝あつまハ目あつま前あつま天下あつまの罪人あつまなり
57. 今あつままでハ 惰弱あつまに保あつまし 我身あつまをも 新あつまに清あつまむ 孝学あつまの席あつま
58. 孝天あつまに 満あつまる匂あつまひを 慕あつまひ寄あつま 人も自善あつまに 濡あつまへる梅あつま
59. 孝行あつまの 道あつまは末広あつまの 要石あつま かしまの神あつまも 人の身あつまのうへ
60. 行人あつまの 頭あつまケ原あつまえ 天あつまくだり 在あつまます神あつまの 孝あつまの元あつま結あつま
61. 真直あつまに 天あつままでとゞけ 孟宗あつまの 雪あつまの中あつまにも 竹あつまの孝行あつま
62. 垢付あつまし 賤あつまが心あつまを 汲あつまわけて 入あつま孝連あつまに 身あつまを清あつまむらん
63. 親あつまなくバ 身あつまに天地あつまや 神仏あつまの 道あつまを守るを 孝行あつまと謂あつま
64. 立あつま木あつま見る 親あつまの老木あつまに 子あつまを接あつまで 孝あつまとなる字あつまぞ 心あつまして読あつま
65. 聞あつまへよく 同あつまじ言葉あつまも 和あつまらかに 孝行あつませよも 叮嚀あつまに積あつま

66. 己に勝 孝にハ負て 行へは 天下に敵なし 禍ひハなし
67. 孝心の 信ハ人の 言葉なり 虚言偽りハ 不行とぞなる
68. 孝の行に 至らんと ならば、先常に 清浄の物を 喰、神棚・仏壇を 奇麗にして 信心すべし
69. 濁りにも 染ぬこゝろハ 孝にして 千草に すすめる 露の白玉
70. 大道の 孝ハ行なり 孝行ぞ 孝は大道 大道は行
71. 孝行は 人の鏡の 天下一 誰姿身も うつしてぞ知れ
72. 垢づきし 身の皮を脱 竹の孝 行がつもれば 雪の中にも
73. 天地の 親へ孝ぞと 知べして 教にたてる 道わけの文
74. 四方に 鳴 神の如くに しらせハや その孝名を 行にとゝめて
75. 孝連に 入てうれしき 意より 天地の父母に 身を任してハ
76. 聖廟孝宦、諸道教主、皆是以孝、開道為本
77. たらちねの かわい鳥の 養育を やしなひ反す 声を聞にも
78. 耳に逆ふ 人も自善や 孝学の たで喰ふ内に 好々となる
79. 常に 務 仁義礼智の 信心ハ 行ふ孝の 中心にぞある
80. 天地の めぐみに 咲る 花と世の ミちにまどはぬ 孝の一ト筋
81. 父母在不遠遊
82. たらちねの 恵ミハふかく 降雪に おもひかさぬる 夜半の小衾
83. 仁人信而孝、術朮実而行
84. 天の川 水上清き 孝行の 流れ久しき 七夕の糸
85. あらそハぬ 風に柳の まことをハ 吹ハなびけよ 孝の一字に
86. 孝行の 祖の源を 汲わけて 名を橘の 井手の玉川
87. 孝はみの かミと敬ひ 行へは 心あんどに 張替る法
88. 子としてハ 老をかむりて 戴ける まことをさとす 孝の一ト文字
89. 四方へ名を 流すうつハや 方円の ミづと素直に つかふ孝行
90. たが為に 孝を駿河の 不二の雪 我身につもる 徳の白妙
91. 譲り請し 祖の行徳を 積あげて 孝ト成世を ゆづる子の栄へ
92. 祖の恩を いつ報じなん 白雪の つもる高根も 孝に解行
93. 孝ぞとハ 思ふばかりの 名のミ成と 今川合の 家に残して
94. 慕ひ行 道の言のは 文わけて 教にちかき 孝学の席
95. 一孝立ハ万善従之 一筋の いとや空井の 几布
96. 孝感入行ノ人連ハ現在ノ罪永消滅ト云々

97. 孝ハ天下ノ大道也 目当より 経によらず さくら狩
98. お孝さん 上の不の字を 取しやんせ 行のお顔が 見たふごさんす
99. 毎朝向水面拜父母影
100. 孝行を かんじ入ます 厚氷 親の重荷も 解かゝる恩
101. 行といはゞ 孝ツト胸に 手を置て 思案仕かえて 身の上を知れ
102. 孝座参会きざんくわいの席はやくへハ 早集り、必ずしも人を待しむべからず
103. 行へバ 心も安く 章あきらかに 内外 治る 孝養きやうの門
104. 包つむとも 頭あらハれ渡る 孝行の 徳はむかに刃向ふ 禍わざはひはなし
105. 孝よの世え 行かうに出たる 孝の身が 心の孝を 行をこなふが道みち
106. 孝ハ身ニ行ヲ謂人ノ道 人の子ハ ひとてありたし ほとゞきす
107. 鎖安さびやすき こゝろの 釧つるぎ 磨とぎたてゞ 孝伏ふくをせよ 邪魔じやまな不じの字を
108. 知や人 不ふハ無有むうハ得うと ばんしやうの 工たくミに同じ 孝の一チ行
109. 孝にしづミ 不孝ふこうにうかむ 川竹の 流ふす不ふもあり 拾ひろふ富ふもあり
110. 身ハ低ひくふして謙退けんたいの庭にハに可をそるへし恐たか、心ハ高かうふして孝位かうぜいの孝前はづべからずニ不可恥
111. 簪かんざしの形かたちををつと 略をす。故かしらニ 頭さすニ指さすハ一本ふニ限いたゞけるへし。二夫をのづかを 戴ふハ 自をのづから孝
義そむくニ 背そむく事有と心得べし
112. 不ふをすてゞ 孝のミにして 行へバ 不ふハ富ふにかわ変ふうきり 富貴ふうきとぞなる
113. 孝の身も 上うへの不ふの字に まよひけり 下した見て過すぎよ 行したひの道
114. 迷まよひひぬる 心も孝に 感かんじてハ 上かんの不ふの字を 取とんとぞ思おもふ
115. 孝行の 心すぐが直すぐに 神仏 外そとにもとむる 聖人せいじんもなし
116. 天地あめつちの 親おやの指さしづ図ずの 種たねおろし 諸穀しよこく陽氣ようきの 孝作きやくを農身のんみ
117. 子農孝しのう 正直しんじきにして 行へば 極きて楽はめし 家業たの万寿まんじゆ✓
118. 孝行を 感かんじて水も 酒なりと変なり 老を養やうふ 和佐美濃わさみのうの瀧
119. 孝徳きやくとくニ 依よつて、 寿よへいを 保たもつ事、八百有余歳、世ニ八百比丘尼ト謂伝シハ、養老孝子ノ妻女
ナリ
120. 内に隠るゝ行徳有バ、外そとに自ら孝名あり
121. 孝行の 味あじハひをよく 知れよかし 大根元こんげんの ぜんむかに向へば
122. 孝名に 連なればこそ 孝あけはゑんに なをも揚羽あけはの子蝶てふかな
123. 賞罰ハ一人を明にして、万人の孝心しんじんに基付もと様に施すべし
124. 忠孝ハ 有あるべきようの 信心しんじんが 至いたる六字ろくじの 御子ごしト成なるかな
125. 孝行を すれば我身われみも 安楽あんらくに 家繁昌はんじやうの本ほんとこそなる
126. 孝トいえば アあたまト頭あたまを 楽書らくがきや 壁板物かべいたに 疵きずをつけなよ

127. 先達の^{せんたつ}をしへの道が あれいこそ 行人^{ゆく}多き 孝のつれなれ
128. 孝養の 門の^{とびら}扉を おし開き 入てぞ受ん おこなひの玉
129. 君に忠 親に孝行 する人ハ 神も守りて 子孫栄ん
130. 父母の 教の道に まかせつゝ すなほに通る 孝の一筋
131. 天が下 孝の一字を 守りなハ 行ふ道に わさハひはなし
132. 以孝学礼、開活花一道、名緑洞三瓶御流、伝孝世也
133. 孝順者高行也 言の葉も 尽せぬ徳や 孝の道
134. 孝と聞ハ つけ子のなくも 親鳥に 似まがふ程の 鶯のこゑ
135. 八百尼^に 三百翁^{をふ}の 寿^{ことぶき}を ミな孝行の 徳にこそあれ
136. 石臼^{いしうす}の 重き^{おも}ハ老の 子引歌^{こひきうた} 孝と張揚^{はりやげ}て 行に止めよ
137. 我里^{なところ}ハ 名所^{なところ}なれや 瓜^{うり}の花^かの 孝と匂^かひを 国々^{くに}へ咲
138. 孝と聞ハ 我一物^{きか}を はなれツゝ、 天地^{あま}まかせを 悟^{さと}るなりけり
139. 孝作^{ひろほこまつ}の 広^{ひろ}茅^ほ行^まる 人^{ひと}ハミな 金^く秋^{あき}色^{いろ}かえて 楽^{らく}の世^よに住
140. 淀^{よど}むなよ 流^{なが}れにしつむ 川^{かわ}竹^{たけ}の 浮^{うか}むも己^{おの}が 孝^{かう}に社^{しゃ}あれ
141. 一身^{いつしん}に 一孝^{いつかう}のたつ 行者^{ぎやう}こそ 信^{まこと}の道^{みち}に かない安全
142. 乱身無大於姦、治身莫大於孝。
143. 孝の字^{あざな}に 心が付^つハ わさハひも 遁^{のが}れて家内^{けいだい} 和合^{わが}するなり
144. 水^{みづ}にせず 孝^{かう}に人身^{じんしん}の 風呂^{ふろ}の湯^ゆに 心^{こゝろ}の垢^{あか}を あらひ清^{きよ}めん
145. 終^{よもすから}夜^よ 忠^{ちゆう}不^ふ寐^み身^みの 八^{はち}声^{こゑ}から 国家^{こくが}孝行^{かうぎやう}と 庭^{にわ}とりが鳴^なく
146. 忠孝^{ちゆうかう}の 道^{みち}を行^いひ 勤^{こつ}れば その身^みも栄^{さか}へ 子孫^{こそん}繁昌^{はんしやう}
147. 素直^{すなを}なる 竹^{たけ}に雀^{すずめ}ハ 忠^{ちゆう}と謂^い 明^{あき}る鳥^{からす}ハ 孝行^{かうぎやう}となく
148. 最上^{さいじやう}の 宝^{たから}といふ 孝明^{かうめい}の ひかりハ人の 行^いひにあり
149. 宝行^{ほきやう}〔カウコウ引〕 孝^{かう}の 行^いひを以^{もつ}て最上^{さいじやう}の宝^{たから}トス、生^なれ出^でるより孝^{かう}を 保^{たもちをこのふ}行^い〔ホキヤウ〕ト謂
150. 孝明^{かうめい}の 内^{うち}へ生^うれて 天地^{あめつち}の 教^をを保^{たもち}行^い〔ホギヤウア、〕ふぞ道
151. 大哉^{たいざい}孝学^{かうがく}ハ天下^{てんか}ノ大道^{だうだう}、万代^{まんたい}不朽^{ふく}ノ師^しナリ
152. 学^{まな}べよや 孝^{かう}ハ諸道^{しよだう}の 要^{かなめ}にて 動^{うご}かぬ世^よ々の 鏡^{かがみ}成^{なり}けり
153. 寄^よ孝^{かう}人^{にん}菊^{きく}園^{えん} 孝^{かう}人^{にん}に 見^みせばや菊^{きく}の 夕^{ゆふ}日^ひばへ
154. 誤^{あやま}りて 心^{こゝろ}を孝^{かう}に 新^{あたら}玉^{たま}の 手^てを拾^{ひろ}ひし 福^{ふく}ひの春
155. 孝徳^{かうとく}如山^{やま}高^{たか}、財宝^{さいほう}如^{ごと}海^{うみ}集^つ
156. 主^{ぬし}ハ誰^{たぞ}と 問^とれて業^{わざ}を 恥^はる身^みも 心^{こゝろ}は孝^{かう}に 澄^{すみ}わたる月

【本文 作者】

	姓	名	国	所	孝名	備考
1	鶴飼	重寛	美濃	佛生寺	双白	
2	吉田	歌輔	美濃	芝北方	吉晴	
3	吉田	佐右衛門	美濃	北方	吉政	
4	下坂	柳平	近江	北下坂	源簡	
5	横幕	久左衛門	美濃	芝北方	孝久	
6	吉田	栄輔	美濃	大井	師軌	
7	上嶋	清兵衛		京都	正純	
8	上嶋	清七		京都	正次	息男
9	渡辺	八右衛門	美濃	加野	正綱	
10	北野	源助	美濃	加野	矩為	
11	宇野	幸治郎		京都	直美	
12	大野	峯女	美濃	加野	礼尾	知里妻
13	鶴飼	七良右衛門	美濃	芝北方	重房	
14	宇野	織右衛門	美濃	北方	正房	
15	豊吉	源右衛門	美濃	四日市	高行	
16	山内	彦輔	美濃	芝北方	免隆	
17	江崎	丈右衛門	美濃	北方	直孝	
18	松尾	源輔	美濃	芝北方	安尊	
19	守屋	玄信	美濃	濃府	守義	
20	後藤	善蔵	美濃	芥見	一夢	
21	後藤	泰治	美濃	芥見	吉信	息男
22	辻	久孝	美濃	古橋	雨林	
23	丹羽	正右衛門	美濃	岩田	以久	
24	水野	伊達助	美濃	古橋	里松	
25	足立	太治郎	美濃	小瀬	直徳	
26	大西	藤兵衛	美濃	葛原百瀬	長秋	
27	大西	藤左衛門	美濃	葛原百瀬	正吉	息男
28	松田	為蔵	美濃	白金	水清	
29	深尾	菊蔵	美濃	岩村	其椽	
30	中村	儀兵衛	美濃	千匹	利勝	
31	堀口	作右衛門	美濃	上之保	貞央	
32	山口	孫右衛門	美濃	白金	山慶	
33	永田	岩吉	美濃	植野	鍊石	
34	大野	与作	美濃	長良	一松亭	
35	下条	藤兵衛	美濃	千匹	経知	
36	松尾	庄左衛門	美濃	見延	桃二	
37	山田	禎輔	美濃	山田	宗福	
38	駒田	岸女	伊勢	安濃津産	佐賀	
39	後藤	孫三郎	美濃	白金	白鳥	
40	河田	熊碩	美濃	城田寺	守躬	
41	永田	彦作	美濃	上野	友次	
42	永田	竹三郎	美濃	上野	正次	舎弟
43	堀	邦太郎	美濃	大洞	正恭	
44	伏屋	長蔵	美濃	伏屋	清川	
45	岩井	久松	美濃	大洞	重継	
46	堀	利佐衛門	美濃	大洞	方正	
47	龜山	久兵衛	美濃	小屋名	政信	
48	岩井	吉太郎	美濃	大洞	置幾	
49	市川	久右衛門	美濃	河渡駅	久胤	
50	足立	友之丞	美濃	小瀬	兼吉	
51	足立	銀	美濃	長良産	美音	妻女
52	小石	三柳	美濃	跡部	水燕	
53	森	弥門治	美濃	牛敷	重慶	
54	松田	嘉兵衛	美濃	白金	為名	
55	足立	喜平治	美濃	小瀬	義記	

55	足立	喜平治	美濃	小瀬	義記	
56	林	伝右衛門	美濃	十八条	重善	
57	足立	栄三郎	美濃	小瀬	義光	
58	河田	別之進	美濃	城田寺	守妙	
59	足立	林治郎	美濃	小瀬	良英	
60	山田	惣右衛門	美濃	白金	高宗	
61	大野	城三郎	美濃	溝口	野遊	
62	神谷	姓女	美濃	山県	霊尾	
63	長屋	重兵衛	美濃	洞戸松谷	金治	
64	星野	双仁	東都		再善	
65	高井	孝輔	美濃	小倉	一鷹	
66	高橋	由兵衛	美濃	文殊	操	
67	足立	健吾	美濃	小瀬	義武	
68	吉田	勝太郎	美濃	稻口	美年	
69	千草	新七	美濃	濃府	白玉	
70	伏屋	勘兵衛	美濃	伏屋	秀福	
71	中村	市郎兵衛	美濃	千疋	慶平	
72	足立	金右衛門	美濃	小瀬	兼次	
73	嶋戸	鐵治	美濃	大森	遊子	
74	坂井	文右衛門	美濃	古一場	共重	
75	高井	角治郎	美濃	小倉	花蝶	
76	渡辺	響造	美濃	伊吹	遊斎	
77	三輪	貞吉郎	美濃	山田	貞庸	
78	高井	忠兵衛	美濃	小倉	免友	
79	国井	斎一	美濃	一日市場	知才	
80	小川	源三郎	美濃	世保	輝月	
81	龜山	政輔	美濃	小屋名	匠賀	
82	森	保三郎	美濃	野白	尚貞	
83	水上	東璞	美濃	濃府	秀成	
84	水上	東	伊勢	四日市産	日明	妻女
85	田中	長太郎	美濃	世保	余慶	
86	西	源蔵	美濃	濃府	橋井館	
87	片桐	半左衛門	美濃	白金	貴重	
88	武藤	庄左衛門	美濃	世保	麒麟	
89	小川	吉五郎	美濃	世保	乙菊	舎弟
90	高田	多賀	美濃	濃府産	友尾	女
91	成瀬	理左衛門	美濃	長屋	正休	
92	成瀬	恒之輔	美濃	長屋	正述	息男
93	河合	寛四郎	美濃	今川	俊親	
94	篠田	五郎右衛門	美濃	側嶋	政道	
95	町野	猶助	美濃	門屋	俚風	俳人
96	宮部	庄右衛門	美濃	野中	安尊	
97	小澤	弥平治	美濃	古市場	鶴兆	俳人
98	玉田	寅之助	美濃	大洞	竹林	
99	梅田	和祐	美濃	伊自良	延年	
100	玉田	伝右衛門	美濃	大洞	得玉	
101	玉田	富治郎	美濃	大洞	玉継	息男
102	梅田	助太郎	美濃	平井	梅香	
103	土屋	兵右衛門	美濃	十九条	秘章	
104	山田	佐兵衛	美濃	白金	登道	
105	高井	巳之助	美濃	小倉	和立	
106	吉田	友十郎	美濃	十四条併	完古	
107	下条	啓作	美濃	千匹	重正	
108	羽根田	万蔵	美濃	濃府	友勝	
109	高井	棚吉	美濃	小倉	良二	
110	高井	龍平	美濃	小倉	子篤	舎弟
111	安田	春野	美濃	山田	貞婦	婦人

112	岩井	定治	美濃	大洞	吉春	
113	伏屋	宅治郎	美濃	伏屋	重治	
114	横山	孫三郎	美濃	鍛冶産	親宗	
115	足立	織衛	美濃	小瀬	矩林	
116	棚橋	藤十郎	美濃	城田寺	守道	
117	西村	国治郎	美濃	白金	道斎	
118	中村	栄輔	美濃	千疋	判泰	
119	関谷	郡蔵	美濃	本田	活庵	
120	真野	小吉	美濃	関	盛重	
121	山田	久左衛門	美濃	白金	房富	
122	高井	回四郎	美濃	四日市	厚德	
123	片桐	浅右衛門	美濃	保明	虎卯	
124	土屋	甚右衛門	美濃	十九条	親民	
125	水谷	儀右衛門	美濃	河渡駅	光義	
126	広江	伊造	美濃	牛敷	武利	
127	坂	熊助	美濃	芝北方	久延	
128	坪内	清四郎	美濃	小梯	包道	
129	清水	真右衛門	美濃	賀野	義知	
130	大野	類治	美濃	賀野	知里	
131	五井	計太郎	美濃	牧田	直行	
132	吉田	佐輔	美濃	芝北方	玉圓齋 子鳳	
133	久富	太吉	美濃	八井	文貞	

134	堀口	孫作	美濃	上ノ保	包治	
135	斎藤	平三郎	美濃	小梯	守孝	
136	太熊	藤左衛門	美濃	上ノ保	守利	
137	福田	伊呂久	美濃	真桑	重奥	
138	亀山	次右衛門	美濃	小屋名	董有	
139	北川	億助	美濃	前野	以止	
140	小川	佐輔	美濃	芝北方	正昌	
141	上野	助右衛門	美濃	藤倉	常義	
142	神谷	建三	美濃	彦坂	定彝	
143	松尾	半左衛門	美濃	見延	安典	
144	鷺見	延昌	美濃	下奈良	祐治	
145	堀	市左衛門	美濃	大洞	正竹	
146	堀	古文	美濃	大洞	千絲	妻女
147	堀	正之丞	美濃	大洞	正氏	息男
148	加藤	七右衛門	美濃	大洞	祐真	
149	加藤	縫	美濃	大洞	女真	妻女
150	加藤	浅太郎	美濃	大洞	祐昌	息男
151	小森	寿平	美濃	佐賀	守永	
152	守永	千代	美濃	鶺鴒	寿	妻女
153	遠山	新右衛門	美濃	濃府	三亀	
154	棚橋	正造	美濃	伊自良	道甫	
155	林	重平	美濃	十八条	義光	
156	小塩	正左衛門	美濃	濃府	文雷	

註

- 1 拙稿『三野人物考 和合編』一順序なき人名録の「謎」と「真相」『教育史フォーラム』第12号、2017。
- 2 「本姓菅原、孝学道人、また清水堂主人と称す。京都堀川頭水火天神社の人、孝親道を開き、諸国を巡回して、孝連を建て、孝道を奨励す。天保の初、岐阜に来り、美濃国内を巡回して孝学を講説す」（伊藤信『濃飛文教史』岐阜・博文堂書店、1937、586頁；同じく、それを踏まえた、岐阜市編『岐阜市史』通史編・近世、岐阜・岐阜市、1981、574頁）；「孝学道人菅原友山は京都堀川頭、寺の内上る所、水火天神社境内に孝学講究所を天保八年春開設した」（林正章「孝学堂の開祖とその主張」『文献』第2号、1959）；「孝学所は、菅原友山が天保初年頃に京都（堀川頭）の「水火天神」という神社内に設けたらしい」（小泉吉永「解題」『江戸時代女性文庫』7、大空社、1994、9頁）。
- 3 本稿中の図は、【図Ⅲ】と【図Ⅳ】以外、すべて私蔵の版本による。
- 4 前掲『濃飛文教史』587頁。
- 5 前掲『岐阜市史』576頁。
- 6 前掲「孝学堂の開祖とその主張」16頁。
- 7 もじる特徴は、『孝養門』（1832年序）と『三野人物考 和合編』（1835年序）にはまだ現れていないが、本書『孝連人物考』以降、それが著しく登場する。
- 8 先行研究において、河瀬友山が「諸国を巡廻」したとの記述（前掲『濃飛文教史』586頁；前掲『岐阜県史』574頁）が見られるが、ほかに史料の根拠がないため、おそらくこの『孝連人物考』【序Ⅰ】の土師友人に関する記述を、友山に当てて誤解したのであろう。
- 9 水火天満宮所蔵の由緒書『当社水火天満天神御鎮坐監臨』に、「養老之大孝子従五位上美濃頭土師友人より五十八代之後胤、濃州大野郡寺内村の住人、河瀬東八郎菅原友景」とある。
- 10 藤川正数「「養老伝説」小考—神仙譚から孝感説話へ」『岐阜女子大学国文学会会誌』第17集、1988。
- 11 『孝連人物考』において、この図は特に「御札」と呼ばれていないが、『孝養門』では、同じような図の隣に「孝の御札、家内ニ張置、信心堅固、恩徳広太、諸願成就、無上靈宝」とある（前掲『三野人物考 和合編』94頁、図Ⅱを参照）。
- 12 国学院大学図書館「河野省三記念文庫」所蔵（請求番号2361、2362）。この施印を「孝養ヶ条」に当たるものとするのは、その末尾にある、「孝養のヶ条、日毎々に為読覧人々ハ、悪事災難を遁、家内和合・立身出世・永栄安樂に基き、生涯危きことなし」（【図Ⅲ】）と、「孝養の箇条、日々に為拝読面々ハ、禍ひ

退き、福ひ来り、為所の願ひ自ら成就して、永く安樂に至るべし」(【図IV】)との記述である。

- 13 孝連関係のいわば、専門用語の引用数は、「孝連」2回(62、75)、「孝学」8回(10、49、56、57、78、94、132、151)、「孝名」3回(74、120、122)である。
- 14 この女性の作者番号は、12、38、51、62、84、90、146、149、152である。
- 15 この女性とは、駒田岸女(38)と神谷姓女(62)である。
- 16 この13所の住居(出身人数)は、大洞(14人)、白金(9人)、小瀬(8人)、芝北方(8人)、濃府(8人)、小倉(6人)、千疋(5人)、世保(4人)、加野(3人)、北方(3人)、小屋名(3人)、城田寺(3人)、山田(3人)。
- 17 この重複している唯一の人物は河田熊碩(40)である。岐阜市城田寺の蘭方医であったようである(青木一郎「濃州蘭学史」『日本医史学雑誌』第23巻2号、1977、24頁)。
- 18 前掲『「三野人物考 和合編」』。この論考において、『孝養門』が施印という私家版として流布した論拠として、『孝養門』の巻末に友山が自分を「施主」と明記している(94頁)と書いたが、この「施主」は「願主」の誤読であったことをここで訂正する。とはいえ、宮城県立図書館「寿庵文庫」所蔵の『孝養門』の巻末には、「京都仙台屋舗内 施主黒瀬氏」があるように、『孝養門』が施印として流布していた証拠はほかにもあるので、仮説自体を訂正する必要はない。
- 19 長谷部八朗「叙文」長谷部八朗編『「講」研究の可能性』第I編(慶友社、2013)11頁。
- 20 「濃府」というのは、『角川日本地名大辞典』にも出ていないほど珍しい名称であるが、『美濃盛衰録』(下巻、「井口旧譜」)には「岐阜ノ濃府ト云伝フ」との記述がある(『美濃盛衰録』岐阜県郷土資料研究協議会、1983、291頁)。また、河瀬友山は「清水堂」と号した由来に関する記述はないが、前掲『当社水火天満天神御鎮座監觴』において、河瀬家の先祖である土師友人は「美濃国本巢郡多度出の麓、清水の里の住人、土師金人の男」であったとあるので、おそらくそれに因んだのであろう。
- 21 安政二年(1855)に刊行された『いろは歌孝行鏡』(一枚摺、私蔵)に「濃州郡上八幡御城下 孝聞中施板」とあり、刊年不明な『大聴利徳の最上』(一枚摺、私蔵)に「尾州熱田宮駅 孝聞中施板」とある。

【附記】

本稿は2015年度グラフィック文化に関する学術研究助成「日本近世の「施印」に関する基礎研究—国内・国外調査と事例研究(公益財団法人DNP文化振興財団)」と、2017年度科学研究費補助金「近世教育メディア史における「無料」の価値—「施印」に着目して(若手研究B、17K12981)」による成果の一部である。また、本稿の執筆にあたって、史料の閲覧と撮影を快くご許可くださった孝学家の方々にお礼を申し上げます。